

45大学×6社による障害学生向けキャリア教育プラットフォーム 「家でも就活オンライン カレッジ」の取り組み

○遠藤 侑（株式会社エンカレッジ 大学支援事業部 サブリーダー）
○小川 健（株式会社エンカレッジ 大学支援事業部 サブリーダー）

1 はじめに

障害学生数は増加の一途を辿っており、日本学生支援機構¹⁾によれば、2023年度の障害学生数は58,141人、障害学生在籍率は1.79%と前年度から0.26ポイントの増加となった。一方で、障害学生の就職率は56.06%と、障害のない学生の78.0%に比べ20ポイント近く低い（面高²⁾、2022）。障害のある学生への社会移行支援の重要性は、ますます高まっているといえる。こうしたテーマに対し、株式会社エンカレッジ（以下「EN」という。）は、2023年6月22日に、22大学、6企業とともに、障害学生のキャリア教育プラットフォーム「家でも就活オンライン カレッジ」（以下「家カレ」という。）を開始した。本稿では、家カレ初年度の取り組みについての報告を行う。

2 背景と目的

まず、なぜ家カレを立ち上げることになったのか、その狙いと課題意識について述べる。ENは、これまで10年以上、計1,000名以上の障害のある学生を支援してきた知見と、大学支援者からの声を踏まえ、障害学生の就労支援における課題の背景を以下のように整理した。

(1) 学生側の課題

個々の学生によって事情はそれぞれ異なるものの、「学業で手一杯で、働くことに繋がる経験が積めていない」という課題は多くの学生に共通している。就労に繋がるアルバイトなどの社会経験が不足しており、身近な社会人との接点も希薄なため、就労についてのイメージがどうしても曖昧なものとなってしまう。また、そもそも「障害のある学生に特化した就活の進め方や、働く障害者のロールモデルについての情報がない」という状況がある。増加してきているとはいえ、就活生全体に比べるとまだまだ障害学生の割合は少なく、また障害学生の「困り感」も個別性が高いため、自分に合ったロールモデルを見つけるのが難しい。これらの課題が要因となって、「就活やインターンに進むことの不安が強く、動き出せない」という事情を生んでいられると考えられる。

(2) 大学側の課題

翻って大学側の事情としては、障害学生支援においてはまず「修学支援で手一杯であり、キャリア教育・就活支援にリソースが割けない」という課題がある。ここには、学生の就活支援やキャリア教育を行う部署であるキャリアセ

ンターと障害学生支援部署との連携が試行錯誤段階にあるという状況も背景にあると考えられる。また、そもそも「1校当たりの対象学生数が少なく、企画を実施しづらい」という状況も存在している。障害学生に絞った形で企画を実施することが難しく、結果的に障害学生にとってはむしろ参加しづらい企画になってしまうことがある。さらに、こうしたことから、「障害学生のキャリア教育に関する情報を探しても、見つからない」という声も多く聞かれた。

(3) 家カレのねらいと目的

これらの課題意識を踏まえ、家カレは、学生に対し「大学横断型」で様々なキャリア教育企画を実施すること、大学支援者に対し、情報交換の場の提供や、勉強会企画の実施など、障害学生のキャリア教育に関する様々な情報やナレッジを得られる場を提供することを狙いとして開始された。さらに、こうした課題意識を共有する企業に学生向けのキャリア教育企画への協力、協賛をしてもらうことで、持続可能な取り組みにしていくことを目指した。

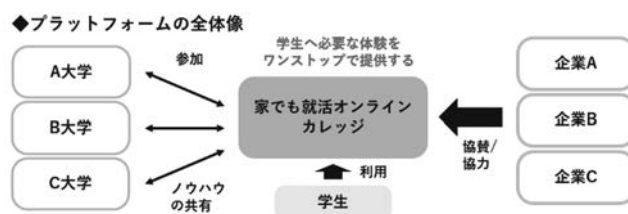


図1 家カレの全体像

3 初年度の取り組み報告

(1) 全体

2023年度は学生向け企画を10月～11月と2月～3月にそれぞれ1回ずつ、計2回行い、のべ70名の学生が参加した。学生向け企画は、それぞれ企業が主導となって開催し、企画段階では企業と大学支援者による意見交換会を実施した。支援者向けの勉強会は10月～12月にかけて3回実施し、のべ64名が参加した。また、協賛企業からの発案で、保護者向けに障害者雇用の状況を伝えるセミナーを12月に1回実施し、16名が参加した。また、こうした企画以外にも、大学支援者向けのクローズドSNSコミュニティを開設した。なお、企画はすべてweb会議システムを用いてオンライン上で実施している。

表1 実施した企画と参加人数

企画名	対象	回数	参加人数
はたらくみらいキャンパス	学生	2回	26名
自分×社会を考えよう		2回	12名
オンラインしごと体験		2回	12名
企業との座談会		2回	20名
支援者向け勉強会	支援者	3回	64名
就活前に知っておきたい障害者雇用の状況	保護者/家族	1回	16名

(2) 学生向け企画

ア 「はたらくみらいキャンパス」

主に低年次の学生を対象に、「働く」とは何か、障害者雇用で企業はどんなことを求めているのか、など、自身のキャリアを考える上での出発点となるようなセミナーである。現職の企業人事担当者からの講義や、実際に障害者雇用で働く社員の話、自身の障害について考えるグループワークなどを行った。

イ 自分×社会を考えよう

企業が開発したワークシートをもとに、今大学で学んでいることを社会課題の解決にどのように活かせるか、を思考するワークショップである。参加学生からは、社会との接点を考えることで、大学での学習意欲が向上した、などの声が聞かれた。

ウ オンラインしごと体験

ENが開発した、障害者雇用で働く先輩のインタビュー動画の視聴と、オンライン上で実際の業務体験ができるコンテンツを通じたワークショップである。参加した学生の声からは、「自分は正確性が高いと思っていたが、実際の業務をやってみると思ったよりもミスが多かった」など、自己理解に繋がる体験となっている様子が見受けられた。

エ 企業との座談会

参加学生と協賛企業各社の人事担当者が、オンライン上で学生と座談会を行う。1グループあたり、企業側が2名、学側が3～5名程度となり、時間制で入れ替えながら実施した。学生からは、「選考の場ではないためリラックスして話を聞けた」などの声が聞かれた。また、企業側からも、「選考以外の場で学生の話を開けるのは貴重。障害学生がどこに不安を感じているのかリアルな情報が得られて刺激になった」という声があった。

(3) 大学支援者向け企画

2023年10月～12月にかけ、大学支援者向け勉強会を全3回実施した。第1回は協賛企業の人事担当者をゲストスピーカーに、企業における障害者雇用の考え方や選考時のポイントなどについての講義を実施した。第2回は、経験の少ない新人支援者向けに、困りごとについて共有しあう会を実施した。第3回は、参画大学の中で経験豊富な支援

者の方に、事例発表という形で障害学生に対する社会移行支援について話をしていただいた。大学支援者向け企画は全3回で計64名の参加と非常に盛況であり、強いニーズがあることが伺えた。

(4) 保護者向け企画

協賛企業の発案で、学生だけではなく保護者向けの企画を1回実施した。大学支援者からも、学生の進路に対して、保護者の価値観や意向が強く影響しているという意見があり、保護者や家族に、障害者雇用の現状を正しく知ってもらうことを目的にセミナーを実施した。保護者が企業の障害者雇用のリアルな情報を得る機会は少ないことから、参加者からは「知ることで不安が解消した」という声が多くあった。

4 最後に

初年度は試行錯誤の繰り返しであった家カレだが、開始から一年が経過し、参画大学は49大学にまで増加している。(2024年8月現在) 障害学生へのキャリア教育のニーズは今後もますます強まってくると考えられる。

最後に、初年度の企画を通じて見えてきた今後の課題について述べる。第一に、学生にとって学外の企画参加のハードルが高いという点がある。これについては、支援者と同伴で出席するなど、新たな企画参加形態を検討している。第二に、大学によって具体的なニーズが異なることがあり、完全に全体のニーズを汲んだ形で企画を実施することが難しいという課題がある。これについては、引き続き参画大学のコミュニケーションを促進し、さまざまなニーズに合わせた企画を開発していく必要があると考える。

【参考文献】

- 1) 日本学生支援機構「令和5年度(2023年度)大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査 結果報告書」, (2023)
- 2) 面高有作『障害のある学生の 社会移行支援に関する調査研究』, 独立行政法人 日本学生支援機構, (2022)

【連絡先】

遠藤 侑
株式会社エンカレッジ
e-mail : yue@en-c.jp